宮崎大学学術情報リポジトリ
University of Miyazaki Academic Repository

翻案とは何か：『偐紫田舎源氏』を手がかりに

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2020-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田, 利博 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5462

翻案とは何か

――『偐紫田舎源氏』を手がかりに――

山田利博

一　問題提起

現代はあまりその意義を問われることなくオリジナリティを重視しているが、それは本当に重要なことなのだろうか。例えば寄席に落語を聞きに行く者や歌舞伎の常連は、その作品で次に何が起こるかなど熟知しているはずだし、卑近な例を挙げれば、少し前まで年末というと『忠臣蔵』が放映されていたから、そのストーリーについてはほとんどの人が熟知していたはずである。換言すれば、古典作品の享受において、オリジナリティなど、さほど重要な要素であったわけでなく、強いて「オリジナリティ」という言葉を用いるなら、演者のそれを見に行っていたはずである。つまりそれは演者による一つの作品解釈であり、広い意味ではこれから取り上げようとしている「翻案」という営為に繋がるものと言えよう。しかしそれは、実は古典のみに留まるものではない。

「稿者のもう一つの専門」と自称するマンガ・アニメの世界では、いわゆる「二次創作」と呼ばれる作品が溢れている。これらは通常、もとの作品と比較して、価値が低いものとして扱われるが、最初に述べたように、もしも「オリジナリティの重要性」がさほど根拠のないものであるならば、一概にこういう扱いをするに当たらないのではないかと思われる。

これは決して稿者のみの暴論ではないと思われる。翻案に近い概念として「偽書」が揚げられると思う（１）が、二〇〇四年三月から二〇〇五年一月にかけて、現代思潮新社から、日本古典偽書叢刊が全三巻で発刊されたし、二〇一一年の二月から五月にかけて、埼玉県立熊谷図書館で、「奇書・偽書・禁書」展が開催された。その「奇書・偽書・禁書」展の謳い文句は、「この世に生まれた数多の本の中で、その由来や評価、あるいは扱いにおいて数奇な運命を辿ってきた本たちがあります。色事や不思議を描いた「奇なる書物」、歴史を揺るがさんとする「偽りの書物」、そして時の統治者たちから厭われ排撃されてきた「禁じられた書物」。これらは内容の是非を問わず、その不思議な魅力で人々の興味を引きつけてやみません。今回は、こうした「奇書」「偽書」および「禁書」に関して記された資料をご紹介しましょう」であった（２）。これはオリジナリティに対する直接の疑いでは

ないが、今まで低く見られてきたこうした書物に光を当てようという試みは、今ようやく始まったところと言えよう。こうした時、「翻案」というものについて、一度しっかり考えてみようという本稿の試みは、それなりに意味のあるものと考える。

方法としては、マンガ・アニメでは、ほとんどの人がもとの作品すら知らない場合が考えられるので、稿者の本当の専門である『源氏物語』を利用して考えてみたいと思う。中世における『山路の露』を始めとして現代に至るまで、『源氏物語』の補作・翻案は数限りなくある。中でも、タイトルからして明らかなものとして、江戸時代の『偽紫田舎源氏』（以下、『田舎源氏』と略称）が存在するので、本稿ではそれと『源氏物語』の距離を測定することを糸口として、「翻案」の概念を改めて定めてみたい。

但し、明治の頃とは違って、現在の国文学会はほぼ時代ごとに専門が分かれているため、このような研究はどうしてもどちらかの作品拠りに立たざるを得ず、稿者の場合は、それが『源氏』であることは、あらかじめ御承知置き頂きたい。

二　『田舎源氏』は「翻案」か「翻訳」か

『田舎源氏』は『源氏物語』の「翻案」と、ほとんどすべての書物に書かれているが、管見の及んだ限りで一つだけ、「翻訳」と位置づけるものがあった。二〇〇七年におうふうから出された、伊井春樹監修・江本裕編集の、講座源氏物語研究第五巻『江戸時代の源氏物語』に収められた、マイケル・エメリックの「『偽紫田舎源氏』をどう読むか――『源氏物語』を越えて――」である（以下、エメリックの論とはこれを言う）。「本論文では、この一件常識的な枠組み（『偽紫田舎源氏』が『源氏物語』の翻案であるということ：稿者注）をあえて離れ、刊行され始めた当初は読者が必ずしも『田舎源氏』を『源氏物語』の翻案として鑑賞していたわけではないという可能性に着目する」（二四八頁）という試みを評価しないわけではないが、「与謝野源氏、谷崎源氏、円地源氏と続いていく現代語訳の系譜の原点に位置するのではないか」（同頁）という氏の見方は、やはり少し無理があるように思うのである。単純な話、『田舎源氏』は、「日本橋近き式部小路といふ所に」住んでいるため、「紫式部と」「浮名（あだな）」される「阿藤（おふぢ）」（＝「偽紫（にせむらさき）」）が書いたと語られ（上巻・六～七頁）（３）、その主人公は光源氏ではなく足利光氏で、内容も室町時代のお家騒動ものとなっているが、与謝野源氏以下の「翻訳」では、そのようなものはないからである。

大体、外国語訳も含めて「翻訳」というものは、言葉の壁などで移し切れていない部分は当然あるとしても、原文になるべく忠実であろうとして、内容・登場人物名を変えるものは先ず無いと思われる。一方「翻案」は、田辺聖子の作品が若干悩ましい（４）が、管見の及んだ限り、少なくとも登場人物名は、皆違っている（５）。それゆえ若干の例外はあるものの、この登場人物名の異同は、「翻案」と「翻訳」を定義する一つの尺度たり得ると思う（６）。

エメリックが指摘するように、『田舎源氏』を『源氏物語』と混同する江戸時代の女性たちがいたとしても、それは享受側の問題で、作者の与り知らぬところである。無論、作者の意図とて断定は出来ないが、良く引かれる十編の序には次のようにある。

初めてこの田舎源氏を、作りいでんとなしたる刻、老いたる友人予　に曰、いかにも源氏の条をくづさず、なるべき程は詞をも、其儘用ひて書たまへ、源氏を読まざる童子の、すこしは助となる事あらん。若き友人予　に曰、源氏の条を翻案して、歌舞伎狂言浄瑠璃の、おもむきに綴り給へ。源氏を読まざる者やはある。予　思ふに、源氏の如く書と教へし老人は熱湯好なり。狂言歌舞伎のやうに綴れとすゝめし人は温湯好なり。是にまどひて初編の草稿いくたびか書きなほし、まづ若き人の意見につき、泥蔵の物がたり、人丸堂の無言場、温く仕込んでおいたれど、標題の源氏がさめて、水になろうと巻・の、詞をそろ／＼折くべて、去年今年と沸かしかけ、既に十編に及びしが、この湯の加減未分からず、赤本にはうつらぬ詞が多くて、熱て読うくおぼさば仙鶴堂を叩給へ。次の編より狂言の水をうめて温くせん。版元は湯屋の亭主、作者は湯番に異ならず。どうでもかうでも這入手（はひりて）が、おほければよいまでにして、（以下略）

（上巻・三二〇～一頁）

最後に「這入手が、おほければよい」と明確に書かれているように、種彦にこれといった方針はないようだが、それでも初編に「泥蔵の物がたり」を入れたところを見れば、原作に忠実に筋を進めるつもりは初めから無かったようである。

無論、原作には書かれていない、光源氏に対する藤壺の思いを、「紫式部に代わって書いた」と公言する円地文子訳『源氏物語』を始めとして、「翻訳」にも原作にない部分が全くないわけではないが、それは原作全体の量から見ればごくわずかな部分に留まり、しかも円地の言葉が表するごとく、やむにやまれぬ事情、『源氏物語』を良く知る者にとっては充分理解可能な理由から生じたものがほとんどである。対して、義母との密通が、倫理観の厳しい江戸時代、しかも天保の改革間近な『田舎源氏』執筆時期においては到底許されるはずもないゆえ光氏と藤の方との関係が、奸臣・山名宗全の密謀を防ぐための狂言に置き換えられるのはまだ理解できるとしても、桐壺帝に当たる足利義政の寵姫・花桐を、正室・富徽の前に代わって苛む昼顔（原作では後涼殿更衣）を、花桐と間違え曲者が殺害する、かの「泥蔵の物がたり」や、原作だと太夫の監に当たる信楽現太夫が、玉葛（『田舎源氏』での読み方は「たまくづ」）が京都に戻ってきているのを知り、拉致しようと諮るが、光氏に打ち据えられる等というのは、やむにやまれぬ必然とは思えない（７）。これらの点を以てしても、やはり『田舎源氏』は「翻案」と捉えるべきであろう。

にもかかわらずエメリックが、「『田舎源氏』は当初から『源氏物語』の翻案だったのではない。それと同時に、『田舎源氏』は、そもそも最初から『源氏物語』の本文をかなり忠実に取り込んでいたのである。鑑賞者側と作者側の間の、このパラドキシカルな構造ゆえに、近現代の研究者は『田舎源氏』を翻案作品と捉え、本文との対応検証を怠ることになったのではなかろうか」（二七二頁）と結論づけたのは、本稿最初に述べたように、原作（＝

オリジナル）を重視し、それと同じ所に価値を見出そうと、無意識的にでもしたからではなかろうか。もっと「翻案」には「翻案」としての価値を見出さねばならないと思うのである。しからばそれは何なのか。節を改めて説明しよう。

三　『田舎源氏』と『源氏物語』との距離

「翻案」の価値については既に野口武彦が、「翻案とはつねに原作其儘と原作ばなれ、重力と浮力とがせめぎあう筆力の場である」と明確に規定しており（８）、基本的には本稿もそれをなぞることになるのだが、野口の挙げた証拠にいくぶん付け加えるところもあると思われるので、このまま叙述を進めることとする。

『田舎源氏』が『源氏物語』の「翻案」だとして、気になるのは野口も言う、その「距離感」だと思われるが、これについては早くに山口剛が次のような対応表を提示しており、これについては誰がやっても、ほぼこの通りになると思うので、そのまま引用する。

桐　壺　　初、二編
帚　木　　三編
空　蝉　　四編
夕　顔　　四、五編
若　紫　　二、六、七、八、九編
末摘花　　八、十、十一編
紅葉賀　　九、十、十一編
花　宴　　二、十一、十二編
葵　　二、十二、十三、十四、二十五編
賢　木　　十四、十五、十六編
花散里　　十六編
須　磨　　十六、十七、十八、十九編
明　石　　十九、二十、二十一、二十二編
澪　標　　二十三、二十四、二十五編
蓬　生　　二十二、二十三、二十四編
関　屋　　二十四編
絵　合　　二十五、二十六編
松　風　　二十六、二十七、二十八編
薄　雲　　二十八、二十九編
槿　　二十四、二十九編
少　女　　三十、三十一、三十二編
玉　鬘　　三十二、三十三編
初　音　　三十四編
胡　蝶　　三十四、三十五編
螢　　三十五編
常　夏　　三十五、三十六編
篝　火　　三十六編
野　分　　三十六、三十七編
行　幸　　三十七編
藤　袴　　三十八編
真木柱　　三十九、四十編（９）

言うまでもないことだが、上段が『源氏物語』の巻名、下段がそれに該当する『田舎源氏』の編名である。因みに種彦自身も、

この編が『源氏物語』の何の巻に該当するか、編の序文等で、ところどころ言及しているから、この対応表は動かない。

一つの巻がそれぞれ一編から五編に対応することは、それぞれの巻の長さがあるからまあ妥当として、ざっと見れば分かるとおり、初～二十四編までは、巻が前後したりしているが、二十五編以降は、ほぼ順番である。このことは山口も気づいていて、「二十編を越すあたりから、努めて本文に就いて、その中から趣向を立てる態度をとり出した」「三十編あたりから、趣向の大綱に合するものの、範圍に於いては、ほぼ逐語譯を試みるやうな態度を見るやうになった。三十八編以下、「眞木柱」の巻に對するに至っては、特にさうであった」と述べている（10）。もっとも「逐語訳」については、エメリックに四編くらいから既に認められるのではないかという意見もあるが、どの程度を「逐語訳」と言うのか難しいけれども、私見ではやはり山口の感覚が正しいのではないかと思う。逐語訳の割合を数値化することは不可能だが、稿者も読んでいて大体そのように感じたし、先ほどの編と巻の対応もあるからである。ただ、エメリックも山口も、証拠としてあげた箇所は似ているとも似ていないとも判断が微妙なので、私に見つけた箇所を一つ証拠として挙げておきたい。三十六編上巻末尾の、原作で言うと常夏巻巻末に該当する箇所である。

『田舎源氏』

葦垣のま近きほどに住みながら、お後影をも拝まぬは、勿　来の関をや据ゑられけん、憚り多くも武蔵野の、ゆかりと　いふはと言へばかしこけれども、あなかしこや〳〵。

とばかり書き、返す返すに、

今宵にも参りたう侍るなり、うるさき者とおぼすほど、あ　やにくに慕はしゝ、折れても切れぬ蓮の根の、糸筋よ。

とてさて歌あり、

くさわかみひたちのうみのいかゞさきいかであひみんたご　のうらなみ

角〳〵しき手にかなとも字とも、見分け難きがうち交じり、のゝ字は丸くしの字は長く、よき手めかして書いたるくだりは、さらに揃はず風の強き、雨の脚ほど横すぢかひ、倒れぬべく見えければ、うち微笑みて側へ置き、「そなたの所へ当吉が」と、問はせ給へば中垣手をつき、「お使ひの帰りと申シて」、「久しぶりで妾も逢いたい。まだ居やるならこれへと言へや」と、のたまふお側に呉竹が、いと近う侍ひしが、文の端〳〵差し覗き、「今様めかしき御文章、殊にお歌の珍しさ、いかゞ崎とは近江の名所、田子は駿河常陸を合はせ、三国一の名歌でや」と、よもや主人の同胞とは、思ひもよらず若き人〴〵、もろとも声立てうち笑ふ。（下巻・五七六～七頁）

『源氏物語』

葦垣のま近きほどには侍いながら、いまゝで影ふむばかりのしるしも侍らぬは、勿来の関をや据へさせ給へらむとなん。知らねども武蔵野と言へば畏けれども。あなかしこや／＼と点がちにて、うらには、まことや暮にも参りこむと思ふ給へ立つは、いとふにはゆるにや、いでや〳〵、あやしきは水無瀬川にをとて、また端にかくぞ。

草わかみ常陸の浦のいかゞ崎いかであひみん田子の浦波

おほ川水のと、あをき色紙ひとかさねに、いと草がちに、いかれる手の、その筋とも見えず漂ひたる書きざまも、下長にわりなくゆへばめり。くだりのほど、端ざまに筋かひて、倒れぬべくみゆるを、うち笑みつゝ見て、さすがにいと細く小さく巻き結びて、撫子の花につけたり。樋洗童しも、いとなれて、きよげなる今参りなりけり、女御の御方の大盤所に寄りて、これ参らせ給へと言ふ。下仕へ見知りて、北の対に侍ふ童なりけり（ママ）とて、御ふみ取りいる。たいふの君といふ、持てまいりて、ひき解きて御覧ぜさす。女御ほゝゑみてうち置かせ給へるを、中納言の君といふ、ちかくいて、そば〳〵見けり。いと今めかしき御ふみのけしきにも侍めるかなと、ゆかしげに思ひたれば、草の文字はえ見知らねばにやあらむ、もとすゑなくも見ゆるかなとて給へり。かへりごと、かくゆへゆへしく書ゝずはわろしとや思ひおとされん。やがて書き給へと、ゆづり給ふ。もていでゝこそあらね、わかき人は、ものおかしくて、皆うちわらひぬ。

（③二三～四頁（11））

周知のように『田舎源氏』は、『源氏物語』中の和歌は基本的に発句に改作しているのだが、「こゝの二歌はもと狂言なれば、発句にあらためず、そのまゝに書り」と、種彦自ら注する（下巻・五七六頁）ように、これだけ荒唐無稽な句は出来なかったためか、そのまま載せているので、より類似が際立っていると思う。このように、山口が書いていることはほぼ正しいと思われるが、ここに不思議な現象がある。「種彦の手記その他を参照して」（12）山口が作り上げ、鈴木重三が補足した（13）、種彦が諸編をいつ作ったかのデータである。

四　原作の重さ

そのデータは六編上以降、最終四十編まで、二十三～二十五、二十七、三十三、三十七、三十九編の七編を除いて、上下どちらかはあるのだが、十、十六、十八～二十二、二十六、二十九～三十二、三十四、三十六～八、そして四十編は、書き始めもしくは書き終わりの日付しか残っていず、執筆に何日要したかの計算が出来ないので、計算可能なものだけ抜粋し、私に計算して次に記す。

六編上　　天保二年二月三日から七日まで**五日間**

同　下　同月十四日から二十二日まで**九日間**
七編上　同年九月二十四日から十月一日まで**七日間**
八編　二丁半ほど三年の春に書き置き、その後九月六日起筆、十六日完成　**約十一日間**
九編上　同月十七日から二十一日まで**五日間**
九編下　二十二日から二十八日まで**七日間**
十一編上　四年八月（小の月）二十七日から九月二日まで　**五日間**
十二編　同年九月十二日から二十八日まで**十七日間**
十三編上　同年十月一日から七日まで**七日間**
同　下　同月八日から十五日まで**八日間**
十四編上　同月二十日に口絵と本文一丁、翌五年八月二十八日続稿、九月四日完成　**約七日間**
同　下　同月五日から十日まで**六日間**
十五編上　同月十一日から十五日まで**五日間**
同　下　同月十七日から二十六日まで**十日間**
十七編上　十二月一日から八日まで**八日間**
十九編下　六年十月一日から十日まで**十日間**
二十八編下　九年一月二十二日から二月十九日まで**二十八日間**
三十五編　十一年一月四日から二月十六日まで**四十三日間**

計算できるのはこれだけであるから、全部で十八編ということになる。もっとも、八、十二、三十五編は上下の記載がないから、ひょっとしたら二編でこの日数ということになるのかも知れないが、だとしても、見て分かるように、大勢に影響はない。単純計算すれば種彦は、十日で一編を書いていることになり、驚くほど速筆と言って良いと思うが、これも見れば分かるように、例外を除き、早い編ほど執筆速度が速く、後になるほど遅くなっていく。無論これは二編の序に、「趣向に尽たらつきた時と、まづ紅葉賀の浄瑠璃まで、腹のうちにて稿（したがき）し」とあるように、物語の冒頭はある程度考えて書き始め、種彦が病没（14）したのは一応天保十三年七月であるが、もともと頭痛持ちであったようであるし、山口によれば（15）、三十八編頃から体調を崩しがちであったらしいから、それらのことがこの現象に影を投げかけている可能性は、当然考慮しておかなければならないが、遅れが目立つようになるのは二十八編下からであるし、紅葉賀に該当する十一編までを除外しても、この大勢はやはり変わらない。となればこの原因として一番考えられるのは、先ほど述べた「逐語訳」調への移行ではないか（16）。

「逐語訳」をすれば速度は速くなりそうなものであるが、稿者は一度これと似たような現象を見たことがある。「訳」ではないが、『源氏物語』をマンガ化した、大和和紀の『あさきゆめみし』である。それは最初、月刊『ｍｉｍｉ』に連載されていたのだが、後に季刊の『ｍｉｍｉ Ｅｘｃｅｌｌｅｎｔ』に移行した。つまり連載の速度が遅くなったのである。もちろんこの背景には、注（6）の拙稿でも述べた、「絵の密度の上昇」もあるとは思う（二三三頁）のだが、これもやはりそこで指摘した、「だんだん（『源氏』に・稿者注）魅入られた感じになってく」という大和自身の

言葉(17)とも関わりがあると思う。つまり、『源氏物語』に忠実であろうとすればするほど格闘の時間は延びてゆく。『源氏物語』は、そのくらい「重い」作品ということになるのであろう。最初に述べたように、これは別に「翻案」を軽んじているつもりでは決してなく、むしろ前節最初に引用した野口武彦の言葉のように、「翻案とはつねに原作其儘と原作ばなれ、重力と浮力とがせめぎあう筆力の場である」ことが魅力だと思う。あたかもそれは母星を回る衛星が遠心力を失うと母星に落下してしまうように、原作にあまりに付きすぎると「翻案」も失速するのではなかろうか(18)。

五　「翻案」とは

野口の『田舎源氏』についての名言と思われるものは、実はもう一つある。義母との密通を避けるために、光氏と藤の方の関係を、奸臣・山名宗全の陰謀を暴くための狂言と組み替えたことに対して、「その翻案結果はあらためて、原作でこの事件（源氏と藤壺との密通：引用者注）がいかに全体の因果法則を支配していたかを、逆光線で浮彫りにしていると言えよう」とする(19)のが、それである。江戸初期の国学者・安藤為章が、光源氏と藤壺の密通を『源氏物語』の「一部大事」と呼んだことは、多分野口も知っていると思うが、つまりこの見方は実に当を得ていると思う。すなわち、「翻案」の効用の一つに、原作の見方の新たな切り口となり得るというのが挙げられると思うのだが、これも決して「翻案」を軽んじているつもりはない。喩えて言えば、「月」を調査すれば地球の歴史が分かるごとく、それもまた「翻案」の立派な価値の一つであると思う。

しかし、「月」はまたやはり「月」であるように、「翻案」もまたそれ独自の存在意義を探らねばならない。本稿でそれに成功したかどうかは分からないが、それは多分原作との正確な重力場の測定であることは示し得たのではないかと思う。換言すればそれは、第一節でも述べたことと通じる、原作をどう料理するかでその料理人の力量を測るということで、それこそが今後の、「翻案」研究の取るべき道だと思うのである。

注

(1)　本稿を書くに当たって、「翻案」「偽書」「補作」と、近い概念の言葉が様々使い分けられていることに改めて気づき、その辺りの線引きの必要性も感じたが、それについては後の課題とし、本稿ではほぼ近似のものとして扱っていく。先ずは翻案の概念をしっかり定めてみたいからである。

(2)　埼玉県立図書館ホームページ（https://www.lib.pref.saitama.jp/stplib_doc/reference/list/curiosa.html）より。

(3)　以下、『田舎源氏』の本文引用は鈴木重三校注の新日本古典文学大系（岩波書店）により、上巻下巻の別、及び頁数を付す。

(4)　完全な「翻案」と思われる「私本源氏物語」も登場人物名は、田辺聖子が創作したものを除き、

原作のままだし、基本的に原文に忠実な、田辺訳の『源氏物語』ですら、桐壺巻は全くないから、一種の翻案と言えるかも知れない

（5）例えば、野村美月によるライトノベル「ヒカルが地球にいたころ……」シリーズ（ファミ通文庫　二〇一一年五月～二〇一四年四月）全一〇巻では、主人公は帝門（みかど）ヒカルで、頭中将は頭条俊吾、朝顔は斎賀朝衣という具合に、皆少しずつ違っているし、現代の高校生ものにした稲葉「みのり」のマンガ『源君物語』でも、主人公は源光海（てるみ）、朝顔は桃園朝日、花散里は花田千里といった具合に、ほぼ同様である。

（6）この定義によれば、『あさきゆめみし』を始めとする、『源氏物語』をマンガ化した作品は、「翻訳」の部類に入ってしまうことになるが、それで良いのではなかろうか。何故ならそれらは、「マンガ」というメディアを用いた翻訳と理解することが可能だからである。詳しくは拙稿「『源氏物語』のマンガ化――古典をマンガ化するとはどういうことか――」（庄司宏子編集『絵のなかの物語』　法政大学出版局　二〇一三年）を参照のこと。

（7）但しこれも良く引かれるように、二編の序に、「歌舞伎、繰り、物語、三ッが一ッになったる絵ざうし」とある（上巻・四二頁）とあることより、種彦の「内的必然性」については良く分かる。

（8）野口武彦『『源氏物語』を江戸から読む』（講談社　一九八五年）「第一部『源氏物語』を江戸から読む」「四、都会文学としての田舎源氏――柳亭種彦の『偐紫田舎源氏』」九七頁。

（9）『山口剛著作集』第四巻（中央公論社　一九七二年）「偐紫田舎源氏について」三三一～二頁。但し、原文は旧字

（10）注（9）と同書。ともに三七一頁。

（11）『源氏物語』の本文引用は、角川学芸出版の『DVD-ROM版　大島本源氏物語』（二〇〇七年）により、検索の便に資するため、大島本を底本とする、岩波の新日本古典大系の巻数・頁数を付記する。原則、大島本の表記を尊重したが、そのままだとどうしても読みにくいので、濁点・句読点を加え、適宜ひらがなに漢字を当てた。ただ、物語において地の文と会話文等を厳密に区別していたかどうかは不明であるため、カギ括弧は付さず、和歌も始まりしか改行されていない

ため、末尾はそのまま続けた（拙著『源氏物語の構造研究』（新典社、二〇〇四年）第3部　テキストの構造、第4章　登場人物と和歌の効用を参観願いたい）。

（12）注（9）と同書三二八頁。

（13）注（3）の「解説」（下巻・七六三～六頁）。

（14）自殺説もあるが、本稿にとってはこの死因の方が都合が悪いので、都合が悪い方で考えておく。

（15）注（9）と同書三四〇頁。

（16）もう一つ、結局『田舎源氏』を未完に終わらせた、迫り来る天保の改革の影響も一応は考えられるが、水野忠邦が実権を握ったのは天保十二年のことのようであるので、この表の範囲には該当しない。

（17）瀬戸内寂聴・秋山虔・大和和紀・馬場あき子・野口武彦『源氏物語の愛』（講談社　二〇〇〇年）二七三～四頁。

（18）注（8）と同書で野口武彦は、「柳亭種彦という作者には期待過剰であることを承知の上でいうのだが、翻案は翻訳と違って、先行作品（あるいは前テクスト）に対して二次元的でばかりあってはならず、それなりに完結した時空圏を持っていなければならない」（一〇四頁）と述べているのも同じ謂だと思う。

（19）注（8）と同書九七～八頁。

（二〇一五年二月二十五日受理）